

出口治明の

歴史と文化が

よくわかる

旅の楽しみ方

出口治明

旅は人生の ご褒美です。



「旅の学びは強烈で、教養の欠かせない一部になります。」

稀代の教養人・出口治明が語る旅の真髄!

出口治明の 歴史と文化がよくわかる旅の楽しみ方

出口治明

星海社

333



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

人間は「人・本・旅」からしか学べない、僕が常々言ってきたことです。

僕は本を中心に学んできた人間です。旅は年2回、夏と冬の長期休暇のご褒美ほうびでした。旅は、本と比べるとお金がかかる贅沢ぜいたくな学びです。しかし五感を伴っている分、旅の学びは強烈です。

「学び」と言っても、旅は直接的にすぐ役立つものではありません。

それでも旅のない人生、旅の記憶が失われた人生を想像してみてください。窮屈きゅうくつな感じがするでしょう。人間はただ同じ日々を繰り返すだけでは満ち足りず、日常から出る時間や、ふだん目にするのではない景色を、すなわち旅を求めています。旅の学びとは、その人が心を惹ひかれ、人生を振り返ったときに忘れたたい経験になり、この世界を理解する解像度を上げるものです。旅の経験は、僕の教養の欠かせない一部になっています。

もちろん、個々人の都合や休暇を取れるかどうか、あるいは病気をはじめとする身体

的な事情によって、どんな旅ができるかは違ってきます。いろいろな理由から「私は旅行に行けない」という人もいるでしょう。そういう人にも、このような旅行記から得られるものがあるかもしれません。

この本は、世界80カ国以上を旅してきた僕の個人的な基準で、特に印象深かった土地や経験について書いたエッセイであり、ガイドです。僕は少なくとも年2回は海外旅行をするのを30年以上習慣としてきました。そんな僕が選んだベスト・オブ・ベストですから、客観的に見ても魅力的な場所ではないかと思えます。旅行ガイドや旅の土産話みやげを聞いているような、または僕と一緒に旅行をしているような気持ちで楽しんでいたければ幸いです。あるいは、歴史好きである僕の常として、本書の中にも世界史の話がたくさん出てきますから、「旅の中でこうやって歴史を楽しむのか」などという読み方をしていただいても構いません。

そして僕は無類の旅好きであるとともに、大分県別府市べっふにある立命館アジア太平洋大学（APU）の学長時代、「サステイナビリティ観光学部」の立ち上げに尽力した人間でもあります。今日、インバウンド需要の重要さが語られない日はなく、日本のみならず世界各国で観光産業は注目されています。この本を手にとってくださった人の中にも、観光業の

従事者や、観光を学問として学ぶ学生がいるかもしれません。そのような人が読んで、観光産業の今後を考えるヒントが何か見つかったなら、大変うれしいです。

出口治明

目次

はじめに 3

1 僕の旅の仕方 10

2 フランス 22

3 イタリア 48

4 ポルトガル 76

5 チェコ 86

6 オーストリア 102

13

トルコ

214

12

ギリシャ

202

11

ドイツ

190

10

連合王国
(英国)

172

9

ペルー

162

8

スペイン

140

7

ポーランド

126

14

中国
(承徳)
246

終章

日本の観光業の未来のために
272

おわりに
276

僕の旅の仕方

まずは僕の旅の仕方を少しお話ししておきましょう。別に真似してほしいわけではありません。誰もが自分にしっくりくるスタイルで旅をすればいいと思いますが、この本の案内人の自己紹介がわりに、僕の旅の仕方をお聞きいただければ幸いです。

旅に荷物はいらない

僕の人生初のひとり旅は、学生時代にした北海道旅行でした。約1ヶ月間、野宿したりしながら、気ままに過ごしました。それまでの家族旅行や小中高校の修学旅行にそれほど印象的なものはなかったのですが、このとき初めて旅の楽しさにめざめました。

「自分の関心が赴くままに旅した方がええな」——そう気づいたのです。

その後、20歳から30歳にかけて、日本の47都道府県をすべて旅しました。20代の旅行はほとんどが国内で、「日本のめばしいところはひととおり回った」と感じてから海外に行くようになりました。

初の国外旅行は27歳のときです。当時勤めていた会社・日本生命からのご褒美でした。社内で論文の公募があり、僕が書いたものが入選したことで旅費と3ヶ月間のお休みをいただいたのです。それで世界一周のひとり旅をしました。

日本からアムステルダムに渡り、ロンドンで2ヶ月ほど英語を話す訓練をしてからパリ、ローマ、ニューヨークへ行って、日本に帰ってきました。最初がアムステルダムだったのは、ヨーロッパ各地に乗り換え便で行くの便利だったからです。1970年代中盤には、日本からヨーロッパの主要都市への直通便は少なかったのです。

一番行きたかったのは、長くあこがれたロンドンです。僕のロンドンのイメージはシェイクスピア作品で形作られました。歴史劇の舞台としてのロンドンを見たかったし、観劇も目的でした。ロンドン塔のような定番の観光地にも行きました。

最初の海外旅行で「荷物はこんなにいらんな」と懲りました。それからは「旅行への持ち物は少ないほどこい」という考え方をしています。たいていのものは現地で買えます。僕は旅先に着いたらまずミシランガイドを買います。それから、ヨーロッパであれば多くの国のほとんどの列車に乗れる鉄道のチケット「ユーレイルパス」を買う。これで十分です。ホテルの予約は1泊目と最終日だけは事前にしますが、それ以外は現地で探します。

どんな町でも、よほどのことがなければどこかのホテルには空室があります。

町歩きを楽しむ

僕は普段、列車での移動中や寝る前には必ず本を読んでいます。旅行中には読書はしません。飛行機の中では寝ていますし、列車ではワインをちびりちびりとたしなみながら、景色を楽しみます。車窓から味わう風景も旅の良さのひとつです。たとえばスイスの景色、アルプスの山々は本当に美しかった。

旅と言うと「有名なあの観光地を見にいこう」と計画を立てる人が多いと思います。僕もそういうお目当てを決めないわけではないですが、旅のきっかけや目的はひとつで十分です。それ以外はあまり事前に予定を詰めすぎず、興味のおもむくまま散策するのも好きです。

時間のあるときはのんびりと人口10〜20万人の小さい町を回っていました。列車に揺られて外を眺めながら、駅から見える町並みがいいところがあれば、降りてみるのです。町に降り立ったら、まずはミシュランを開いてひとつ星以上のホテルを探し、その日の宿を確保します。LHW（リーディングホテルズ）であれば間違いありません（高いですが）。L

HWは高級ホテルとリゾートの国際的な組織で、多くのホテルが加盟しています。部屋が広くてきれいで気持ちがいいですし、スタッフの仕事の質が高く、旅行者への対応にも慣れていて、ユーモアもあります。そういうプロに町のことを尋ねてみます^{たず}。

町に繰り出すと、歩ける範囲で教会、お城、大学、美術館等に行ってみます。ヨーロッパでは教会前の広場が好きですね。教会は地域、宗派、年代によって建築の様式や雰囲気の違いがありますから、それぞれに楽しい。市場も見ます。市場で物価を眺めると、その国のリアルな政治経済、地域の生活者の実態・実感に近い情報がわかります。

徒歩で行けない範囲にはタクシーで行きます。でもタクシーはそんなには使いません。町歩きをしながらゆっくり見たいからです。自分で車の運転はしません。お酒が飲めなくなりますから。

食事はホテルで「どこの店がいいか」を3ヶ所教えてもらい、実際に店構えを見て入るかどうかを決めます。たくさんお客さんが入っているお店なら間違いありません。ミシュランガイドに載っている店なら言うまでもなく信頼できます。でも、食はある程度以上になればみんなおいしい。僕はなるべくその土地ごとのローカルフードを選びます。たとえば味が普通だったとしても、思い出になります。

食べ物以上に違いがはつきりわかるのは地元のお酒です。たとえばボルドーで飲んだワインは、聞いたことがない銘柄めいがらでもおいしかった。中国に行くと地元のビールを飲みます。地元のお酒はその土地の料理に合ったものが造られています。ですから、一緒に楽しむのが一番なのです。

夕食の予算は食事5千円＋ワイン5千円くらいを目安にしていました。今では物価も変わっていますから、あまり参考にならないかもしれません。食事以外は予算を特に決めず、なるべく安く済ませるでも、特別な贅沢をする旅でもありませんでした。

町歩きは1日だと見足りないことが多く、2日かけて、だいたい同じやりかたで見られるだけ見ました。2日過ごして大体のものを見たら、次の町に行く。でも、特に気に入らたらもう1泊する。このスタイルで、これまでに80カ国以上は旅行しました。

ヨーロッパに関してはひととおり見たいところには行けたと思っています。でもアメリカ、アジア、中国、ラテンアメリカ……まだ行きたい国は無数にあります。中東・インドではイラン、インド、ウズベキスタン、パキスタンは行きましたし、アフリカは南アフリカ、カタール、モロッコ、エジプトに行きましたが、まだまだですね。

個人でいきづらい場所は団体旅行で

これまでできてきた旅のうちで、家族などとの団体旅行が半分弱、ひとり旅が半分強くらいでしょうか。

旅先には個人では回れない場所がしばしばあります。団体で予約を取らないとひとり客は受け入れていなかったり、鉄道もなくタクシーでは割高で、交通が不便だからみんなバス旅行したほうがよかったり——そういうところには自らツアーコンダクターを買って出て、参加者を募りました。そうすると団体旅行でも自分が行きたいところに、自分のペースで旅程を組んで行けるからです。僕はこれまで、15回ほど旅行を企画しました。

たとえばミシランの星付き料理を食べに行くツアーや、広大な中国の古代王朝の殷墟いんきょを観に行く旅などです。面白そうな内容なら、人は集まります。

旅行の時間をどう作るか

僕は年に2回、必ず長期旅行をしています。そう言うと、「仕事はどうするんですか？」と質問されることもあります。

答えは簡単です。

「毎年2回、1月と8月の長期休暇には海外に行きます。その間はいません」と周囲に伝える、それだけです。「仕事の連絡はしないでください」と言っておけば、よほどのとき以外、連絡は来ません。不在の期間は「任せる」と決めて引き継ぎすればいいのです。最初のうちは「なんやあいつ」と思われていても、くりかえすうちに「あの人はそういう休みの取り方だから」と周囲も受け入れるようになります。

荷物を最小限に、身なりを質素にすればスリにも遭わない

関心のおもむくままに町を歩くといつても、危険なおいがするエリアには行きません。人がいる道を選びます。大きなスーツケースを引きずっているといかにも「観光客」という雰囲気があり、狙われやすくなります。だから極力手ぶらに近い状態にして、お金を持つていそうな格好はしないのが大事です。有名な観光地にはスリもいますが「こいつはカネがなさそうだ」という雰囲気を出しておけば狙われません。

お土産は日本に帰ってきてから空港で買う

荷物が増えるると不便ですから、旅先でお土産は買いません。せいぜいポストカードくら

いです。旅は、その場で楽しむことが大事です。職場や家族へのお土産は成田空港や羽田空港で買っていました。だいたいチョコレートを買っていましたが、それで文句を言われたことはありません。

旅行会話はお決まりのフレーズと単語で乗り切れる

旅行会話は切符を買う、ホテルに泊まる、食事を頼むといった決まりきったことが多いですから、「ローマまで、切符1枚」くらいが言えれば用が足ります。初歩的なフレーズと単語で思い切って聞けば、そんなに難しくありません。

英語が通じない国や地域もありますが、要領は同じです。最低限の現地語さえ言えれば、何とかかなります。

このようにして僕は、80カ国以上を旅してきました。次章からは国別に、実際に体験した旅行先のベストを綴^{つづ}っていきます。

僕は1992年から95年にかけて、ロンドンで毎週発行される日本語の壁新聞に「ヨーロッパの地方都市を訪ねて」と題して旅行記、観光案内を連載していました。この連載を、旅をテーマにした本書にも、章末コラムとして再録したいと思います。

ロスキレ

北欧の玄関となるコペンハーゲンは、人魚姫の像で有名な活気のある美しい港町である。そのコペンハーゲン中央駅から北西に近郊電車で約30分も走れば、そこはもうロスキレ(Roskilde)である。ロスキレは人口約5万人のフィヨルドに面した静かな古都である。

15世紀に首都がコペンハーゲンに移るまで、この町はデンマークの王都であり、北欧ではもともと大きな町として知られていた。駅前からバスに乗ってまずフィヨルド(港)まで出てみよう。港の東側に小ぢんまりとしたヴァイキング船博物館がある。こ

ここには5隻^{せき}のヴァイキング船が常時展示されている。いずれもロスキレのフィヨルドの海底から引き上げられたものだ。ヴァイキング船のミュージアムとしてはノルウェーのオスロのものが有名であり、陳列されているヴァイキング船のスケールも大きく、また保存状態もきわめて良好である。しかし、それらは、いずれも葬礼用の船としてヴァイキングの王族の墓から掘り出されたものである。これに対してロスキレのヴァイキング船は、現実に使われていたものである。ヴァイキングの人々は、意外と慎重なところがあり、使い古した船を同族の攻撃から町を守るための水中障害物として、入江の奥に沈めたのである。したがって、ロスキレのヴァイキング船は保存状態も各々ではあるが、この小さな帆船で、はるか昔の祖先達が、はるばるとグリーンランドや北アメリカまで波濤^{はとう}をこえて行っただのかと思うと、興味は尽きない。博物館のガラスを通して目前に拡^{ひろ}がるフィヨルドに、素朴で荒々しい船団が今にも現れてきそうな感じがする。

ヴァイキング船の見学が終わったら、港の南方にある緑がいつぱいの公園の中の小道をゆつくりと町の方角に上がっていきこう。疲れたら振り返れば良い。段々と高く登るにつれて、フィヨルドが様々に姿を変えていく。その光景は本当に美しい。季節が

よければ、あたり一面に赤いポピイの花が咲き乱れているだろう。30分も経たないうちに、デンマークきつての名刹^{めいさつ}、ロスキレ大聖堂の赤いレンガの建物が目前に現れる。ここは世界最古の王家（日本の皇室を除いて考えているようだが）、デンマーク王室の墓があるところである。大聖堂の周辺は旧市街であり、人や自転車（自動車ではない）が、自在に行き交う人なつっこいダウンタウンになっている。

ロスキレの街角で、デザインに優れた北欧のお土産物を探すのも楽しい。一休みをしようとすれば、有名なCafé Satchmo (Rosenhavestrede) に勝るところはない（大聖堂から歩いて5分）。コペンハーゲンに戻れば、中央駅のすぐそばに有名なチボリ公園がある。夜のチボリは、イルミネーションがゆらめいて、昼とはまた違った表情をみせる。公園内に数あるレストランで夕食をとり、童心に帰って、たとえば星空に飛び出すような小さいジェットコースターで夜の一時を過ごすのも楽しい。

フォントヴロー修道院 フランスに埋葬された英国王

パリには少なくとも三十数回、どこかに行くための滞在拠点としたケースも含めればおそらく50回は訪れました。あるとき、昔から見たかったフォントヴロー修道院に、パリからひとりで向かったことがありました。

たまたまパリで5本の指に入ると言われるル・ブリストル・パリで宿が取れ、ホテルのボーイに行き先を告げると「今日中にフォントヴロー修道院に行って帰ってくる？ それは無理ですよ」と言うので「じゃあ明朝またここで会えるか、賭けをしよう」「いいでしょう、あなたが勝ったら朝食をおごります」——そう約束して宿を出ました。

フォントヴロー修道院はパリから南西に約300キロメートル、TGV（高速鉄道）で約2時間半の距離にあります。パリから往復の移動だけで5、6時間、じっくり見て食事もとったら「日帰りは無理」との意見もわかる距離でした。

12世紀に創設されたフォントヴロー修道院は中世を通じて栄え、特にイングランドとフ

ランス西部を支配したプランタジネット朝（1154年〜1399年）の庇護を受けて、プランタジネット家（アンジュー家）の墓所にもなりました。見どころのひとつは、プランタジネット朝をひらいたイングランド王ヘンリー2世とその妻アリエノール・ダキテーヌ、そして彼らの息子リチャード1世（獅子心王）のお墓です。彼らの彫像もあり、中世彫刻の傑作として知られています。

イングランド王室の夫婦なのに、フランスにお墓がある。面白いですね。一体なぜ、イングランドの国王がフランスに教会とお墓を建てようとしたのでしょうか。

その理由は、ヘンリー2世がイングランド王であると同時に、フランスの貴族ノルマンディー公でもあったからです。



ヘンリー2世夫妻の墓（奥）と
その息子リチャード獅子心王夫妻の墓（手前）

ノルマンディー公国は、911年にフランク王シャルル3世がヴァイキングの首領ロロに与えた領土に起源を持ちます。当初ノルマンディー公国はフランス王国の一部で、ノルマンディー公はフランス王の封臣（君主から土地や官位を与えられた家臣）でした。王と封臣であるノルマンディー公の関係は、封建制度という仕組みです。ノルマンディー公は王に忠誠を誓って軍事的支援を提供する、そのかわりに領地の統治権を得るのです。

でも時が経つにつれてノルマンディー公国は実質的な自治権を獲得していき、11世紀のノルマンディー公ギヨーム2世の時代に大きく成長します。1066年、ギヨーム2世はイングランドを征服し、イングランド王ウィリアム1世となります。いわゆるノルマン・コンクエストです。ノルマンディー公がイングランド王を兼ねること、ノルマンディー公国は形式上フランス王国の一部だけれども、実質的にはイングランド王国と結びついた独立性の高い存在となりました。

さらに、12世紀半ばにイングランド王・ノルマンディー公に即位したヘンリー2世は、フランスの大貴族の娘アキテーヌ公女アリエノールと結婚し、アキテーヌ家が持つフランス南西部の広大な領地も手に入れました。この時代、プランタジネット朝は最盛期を迎えます。

ヘンリー2世夫妻は大のフランスびいきだったので、イングランドの王家の墓をフランスに置くことに決めたのです。ただパリまでは支配していなかったので、パリからずいぶん離れたところにお墓がある。そういうわけです。

僕はこのお墓を実際に見て満足し、深夜にパリに戻りました。翌日、ホテルでボーイを見つけて「僕が賭けに勝った」と言うと、彼は「何のこと？」という顔をしました。なんと、昨日の約束は忘れられていた！

でも「ヘンリー2世はイングランド王だけど、フランスの一部を支配していたからお墓がフランスにあつて、それを見にいくと言ったでしょう」と話したら「ああ！」と思い出し、こころよく朝食をおごってくれました。こんなやりとりも、旅の楽しさです。

シャンゼリゼ通り 世界随一の近代的な大通り

ルーヴル美術館には本当に何度も通いました。レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナリザ」は何度見てもいい絵です。ヨーロッパの絵画めぐりに関しては星海社新書の『出口治明学長が語る 人生が楽しくなる世界の名画150』でたっぷり語りましたので、よろしければそちらもご覧ください。

さて、パリにある「世界一有名な通り」と言っても過言ではないシャンゼリゼ通りは、ルーヴル宮から凱旋門^{がいせん}、そして新凱旋門までが一直線に連なっています。これはすぐれた都市計画に基づいたものです。ナポレオン3世が1853年からセーヌ県知事のジュール・オスマンとともにパリの大改造に取り組み、大通りの施設、緑地の増加、上下水道整備などを実現し、オペラ座建設なども行った遺産のひとつがシャンゼリゼ通りなのです。かつては不衛生でごちゃごちゃしていたパリの町は、ナポレオン3世のパリ改造計画によって一新され、シャンゼリゼ通りもゆつたりと広く拡幅されて新しい舗装が施され、並木が植えられました。

のみならず、シャンゼリゼ通りはルーヴル宮殿からコンコルド広場を経て凱旋門に至る一気通貫の道となりました。シャンゼリゼ通り沿いの建物の高さや外観に関する規制も導入されて、統一感のある町並みが作られたのです。ルーヴルからコンコルド広場までが約1・9キロメートル、コンコルド広場から凱旋門までも約1・9キロメートル、凱旋門から新凱旋門までは約4キロメートルと2キロメートル単位で刻む形で設計されています。つまり約8キロメートルもまっすぐな道が都市の中心部を走っています。長いだけでなく、通りの幅も広い。こんなふうに直線的に道を開発した都市は世界中を探してもパリにしか

ありません。非常に近代的な、計画的な都市づくりです。この通りがパリで一番の見どころと言っているでしょう。

パリはナポレオン3世が作った町です。これに対してたとえばロンドンは町衆の町であり、シェイクスピアの町でもあります。そういう町並みが今でも残っています。東京は雑然としていて都市計画があまり機能していませんし、京都は計画的に作られています但規模は小さいのです。

その後、フランソワ・ミッテラン大統領（在任1981年～1995年）によるパリの都市改造プロジェクト「グラン・プロジェクト」では、旧ルーヴル宮殿の約3分の1を占めていたフランス財務省のオフィスを追い出して宮殿全体をルーヴル美術館に改築し、美術館の中庭にガラスの「ルーヴル・ピラミッド」（1989年完成）を建設し、ルーヴルに始まり凱旋門を経て続く、シャンゼリゼ通りが象徴するパリの歴史軸の終点として新凱旋門（グラン・アルシュ）が位置づけられました。

僕が訪れた回数でいうと、パリはローマに次いで2番目に多い町です。パリは1850年代から大改造された都市であり、近代的です。流行の最先端があり、新しいものが好きな人にはたまりません。対照的にローマは古典的で、2000年のあいだずっと変わらな

い古いものがあります。いずれも甲乙つけがたい魅力的な都市です。

シャンティイ城・コンデ美術館 門外不出のフランスの名品

パリから北に約50キロメートル離れた郊外にあるシャンティイ城もすばらしいです。

中世を起源とし、ルネサンス時代に大改築が行われ、17世紀と19世紀にも建築・改築がなされた壮麗な城館です。総面積115ヘクタールに及ぶフランス式庭園も美しく、幾何学的なデザイン、噴水、運河などが魅力です。

17世紀にお城の大規模な拡張を行ったのがルイ1世・ド・ブルボン＝コンデでした。フランスで勃発していたプロテスタント（ユグノー）とローマ教会の宗教戦争においてユグノー側を率いて戦ったルイ1世はフランス軍の名将であり、芸術のパトロンでもありました。

城内にあるのが彼の名を取ったコンデ美術館です。この美術館はルーヴルに次ぐフランス第2の絵画コレクションを誇り、ラファエロ、ボッティチェリ、プッサンなどの巨匠の作品を見ることができます。たとえば、ラファエロ・サンティの「三美神」は17センチメートル四方の小さな板絵ですが、イタリア・ルネサンスの名品です。

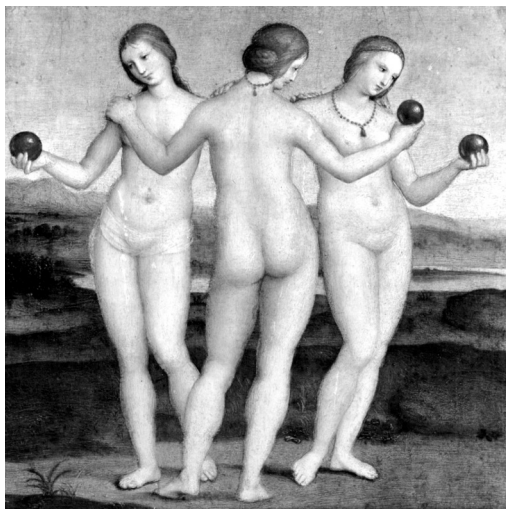
なお、美術館の創設者であるオーマル公爵は「コレクション全体がひとつの芸術である」と考え、彼の遺言によって所蔵品の館外貸出は禁止されています。ですからコンデにある傑作、佳品、それから素描のような貴重なものはいずれも、ここで見られませんか。

ボルドー ワインを味わう旅

あるとき「そうだ、ボルドーに行こう」とふと思い立ちました。

僕が日本生命のロンドン現地法人社長だった頃のことです（1992年～1995年）。金融系の同業者を10人ほど募り、僕が手配をして1泊2日、貸し切りバス旅行を企画しました。ボルドーは広すぎて公共交通では回りきれないため、バスを借りたのです。

港町ボルドーはフランス南西部、ジロンド県の県庁所在地で、11万ヘクタールに及ぶ世



ラファエロ「三美神」

界最大のぶどう畑を誇るワイン産地です。

ボルドーにはガロンヌ川、ドルドーニュ川、そしてこの2つが合流して形成されるジロンド川が流れています。ガロンヌ川とドルドーニュ川の合流点付近は幅が約3キロメートル。僕らはボルドー郊外でバスを降りてジロンド川を船で渡ったのですが、「これは冒険だな」と感じるものでした。

ジロンド川を渡る市内の主要な橋は、海からかなり離れた場所に位置しています。僕らがぶどう畑を見に行ったあたりはジロンド川が大西洋に注ぐ河口付近であり、大規模な橋は存在しません。なぜかといえば河口が最大幅約12キロメートルもあって橋の建設が技術的に難しく、また、船の航行の妨げになるからです。ですから船で渡るしかないのですが、あまりに川が広大で「無事に渡れるかな」という気になりました。しかも僕らが乗るのはせいぜい50人程度がキャパシティの小さな船です。何にもない、質素な船でした。

はたして不安は杞憂に終わりましたが、渡った反対側もやはり一面ぶどう畑が広がっています。10月の終わりでしたから、もうぶどうは実っていませんでした。主要な品種で言うともメルローの収穫期が通常9月中旬から下旬、カベルネ・ソーヴィニヨンが9月下旬から10月上旬、カベルネ・フランがメルローとカベルネ・ソーヴィニヨンの中間ですからね。

でもポツポツとはあって、少しいただきました。正直、味はよくわからなかった。ワイン用のぶどうで渋みや酸味が強く、収穫時期も最盛期は過ぎていましたから。それでも「これが時を経るほど値上がっていくボルドーワインのぶどうか」と眺めながら味わいました。ジロンド川を見終えると、ボルドーの北東にある高品質なワイン産地のひとつ、サンテミリオンまで移動し、歩きでシャトー（ワインの醸造所^{じょうぞう}）を3つ回りました。

サンテミリオンでは、古代ローマ時代からワイン造りが行われてきました。町の中心部は中世の面影を色濃く残し、石畳の急な坂道や石灰岩でできた建物、地下には広大な石切り場跡があり、一部はワインセラーとして利用されています。

ボルドー周辺には約8000のシャトーがあり、サンテミリオンに限っても約800の生産者がワイン造りに携わり、年間約3500万本のワインを生産しています。シャトーツアーは1時間くらいで、ぶどう畑の見学や醸造設備の説明、ワインの試飲などができます。ツアー定員は20〜30人、われわれ以外にも含めて2、3組の団体で一緒に参加しました。ぶどうの保管や加工をしている建物の中をワインを飲みながら見る時間が60%、ぶどうからワインになるまでの行程を見る時間が40%くらいで、ひとつの畑で5銘柄くらいの特級酒を少量ずついただきました。シャトーは土地ごとにワインの味が異なり、現地に行かな

いと飲めないようなワインもたくさんありました。

シャトーツアーをはしごした結果わかったのは「ボルドーのシャトーはどこを選んでも間違いない」ということでした。

ボルドーでの夜のディナー、翌日のランチもすばらしいものでした。当時のミシュランガイドに載っていたフランス料理の星付きレストラン——正確に言えばレストランとワイナリーが一緒になったルレ・エ・シャトーです。ルレ・エ・シャトーとは1954年にフランスで設立された高級ホテルとレストランの国際的な協会のことで、世界に約580、フランスには約180の加盟施設があります。ボルドーでは多くの場合、歴史的な城館や邸宅を改装したもので、宿泊施設と高級レストランを備えています。たとえばサンテミリオンにある「シャトー・グラン・バライユ」は19世紀に建てられた城館を改装したホテルで周囲にぶどう畑が広がり、メドックにある「コルデイヤン・バージュ」は有名なワイン生産地ポイヤックにあって、2つ星ミシュランレストランを併設しています。

僕が行ったお店はたしかひとつはラ・グラン・ヴィーニュ (La Grand Vigne) だったと思います。もうひとつのほうはお店の名前を失念しました（いまはもう閉店している可能性もあります）。

ボルドーは1814年、ナポレオンの時代に連合王国 (United Kingdom、いわゆる英国) 軍に攻め込まれているのですが、当時ボルドー市民はこれを歓迎してブルボン王家の白旗を掲げています。なぜフランス人が連合王国の軍隊を喜んで受け入れたのでしょうか。

それは、ボルドー市民はナポレオン帝政に不満を溜めこんでいたからです。

フランスのワインといえばブルゴーニュが「ワインの王」、ボルドーが「ワインの女王」と呼ばれ、ライバル関係にあります。ブルゴーニュが主に国内消費用のワインを作る一方、港町ボルドーからはロンドンへ向けて国外向けワインが盛んに輸出されていました(今でもそうです)。

しかしナポレオンは「私はシャンベルタンしか飲まない」と言いました。シャンベルタンはブルゴーニュの赤ワインですから、非常なブルゴーニュびいきです。

それだけではありません。ナポレオンは1806年に対英経済制裁として大陸封鎖令を発令し、ボルドーワインの輸出を禁じました。そのせいで、ナポレオン時代にボルドー経済は大打撃を受けていたのです。ボルドーからイングランドへのワインの輸出は、12世紀にボルドーを相続した名家アキテーヌ公女がアンリ・プランタジユネ(さきほど言った、のちのイングランド王ヘンリー2世)と結婚し、ボルドーを含むフランス南西部を嫁入り財産

とした頃から盛んでしたし、ボルドーはその後300年くらいイングランド領でした。中世から何百年も続く貿易が禁止されたら、怒るのも無理はないですね。

だからボルドーに連合王国軍が入ってきたときに、ボルドーの人たちはむしろ英国側に付きましました。

僕がロンドンに勤務していた時にも、食事の席やパーティの際にはよくボルドーワインが出てきました。そのことをあるフランス人に振ると、こう返ってきました。

「私はロンドンの町は少しもいいとは思わない。でもたったひとついいところがある。ロンドンには良いワインがある。そう、ボルドーワインだ」と。

余談ですが、ボルドーの宿泊先のホテルには無人の温水プールがあり、男性陣のうち数名と翌朝6時頃から裸でプールで泳ぎました。僕はホテルに泊まると早朝に泳ぐのを習慣にしていた、ほかのみんなも誘ったのです。

そのあとバスに乗ると、ツアーの一員だった興銀（日本興業銀行）の現地法人副社長の40代女性と隣の席になり、「朝、見ましたよ」と耳元でささやかれました。何を見たのだろうと一瞬考えましたが、すぐに察しました。僕らが素っ裸でワイワイ泳いでいるとも知らず

に、その女性はプールに来て覗いてしまったのですね。まさかそんなことになるとは僕も予想しておらず、びっくりして「えっ、あ……そう」と漏らすのがせいっぱいでした。旅先でハメを外すにしても、気をつけないといけません。お恥ずかしい限りです。

コルシカ ナポレオンの生家より印象深いレストラン

ナポレオンつながりでコルシカ島に1泊2日旅行に行ったときのこともお話ししましょう。ナポレオンの生家が見たいと思い、6月の休みに十数人を集めて旅行しました。

コルシカ島はフランス本土の南東約170キロメートルに位置する、地中海で3番目に大きい島です。現在の人口は約35万人。地理的にはイタリアのほうが近く、かつてはイタリアのジェノヴァ共和国やトスカーナ大公国の領地でもありました。

僕らは島の北東にあるバスティア・ポレッタ空港から3時間くらいバスに揺られて移動して、島の西海岸にある港町アジャクシオにたどり着きました。

アジャクシオにあるナポレオンの生家は、いまは国立博物館となっています。総面積は約1000平方メートルと広い邸宅で3階建てです。ナポレオン家の家具や肖像画、それからナポレオンのお父さんの書斎やお母さんの寝室まで、当時の生活を再現した展示など

が見られます。それなりに大きいのですが、1時間ほどで見終わってしまいました。

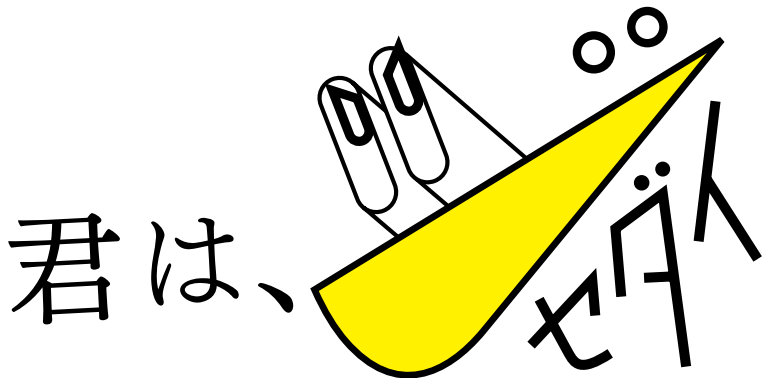
コルシカは地中海性気候で、夏は暑く、乾燥しています。僕らが行った日も天気がよく、6月ながらすでに暑かった。港の湾内を一周する遊覧船にも乗り、天気恵まれたこともあつて景観は最高でした。

その後、港から山の方まで予約したオーヴェルジュに向けて時間をかけて北上します。オーヴェルジュとはフランスの伝統的な宿泊施設で、田舎や小さな町にある、宿泊と食事を提供する小規模で家庭的な宿のことです。コルシカにあるオーヴェルジュの多くはコルシカ建築を基にし、海沿いの村落や山間部などに石造りの外観や木製の装飾の店舗が点在しています。地元の食材を使ったシャルキュトリ（特にコルシカ特産のブリゾット）や子羊や子豚の丸焼き、キャストラート（羊肉料理）、プロチオ（チーズ）を使ったコルシカ料理を出してくれます。

お店に着くとオーナーに、外の席へと案内されました。「この暑い中、外のテーブル席？」と思いながらも、僕らはテーブルをはさんで5人くらいずつ向かい合わせに座りました。座ってみると、足下が掘りごたつのようにくぼんでいることに気がきました。テーブルの下に、テーブルを突っ切るように細長く穴が掘られていたのです。人工的に作られた

くぼみです。何だろうと思っていると、お店の人が「靴を脱いで」と言いながらけっこうな量のお水を持ってきました。「はあ、なるほど、この穴に水を入れて、そこに裸足で足をつつこんだらひんやりするで、と。そういうしかけか」——実際やってみると、涼しくなりました。大人が集まってみんなで裸足になつて食事する機会なんて、滅多にありません。新鮮な気持ちになりました。料理の味もすばらしく、僕が40歳前後、ロンドン駐在時代に行つた中でもっとも記憶に残っているレストランです。

目当てにしていたナポレオンの生家より印象深いレストランと出会うのも、旅の面白さです。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!